

# 〈豊かさ〉と〈望む生活〉

——現代版消費アスピレーションを考える——

佐野 美智子

## Plenitude and Life-Style Aspiration

——Changing Value of Spending——

Michiko SANO

**要旨**：本研究の目的は、消費者が手に入れたいと望む生活の内容を明らかにし、それを手に入れようとする要求（アスピレーション）が、どのような消費態度や行動につながるのかを明らかにすることである。アスピレーションと消費の関係について、概念モデルを構築することが目的であるため、質的研究方法をとった。個人に対する半構造化インタビューを行い、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA と略記）により、概念モデルを構築した。GTA は、データに基づく根拠のある理論生成の方法である。インタビュー調査の対象者は子どもがいる既婚者とし、多様な年齢層やライフステージ、世代から選んだ。分析の結果生成した3つの概念〔安心した生活〕〔身の丈の暮らし〕〔充実した生活〕を【望む生活】としてまとめた。【望む生活】を規定する【豊かさ】は、〔お金の困らないこと〕〔好きに使える時間〕〔人との関わり〕である。【豊かさ】と【望む生活】は、〔お金の使い道〕【支出行動】【貯蓄・支出態度】という消費態度・行動に関連する。最終的に構築した「望む生活と消費態度・行動に関するモデル」では、消費態度・行動に影響する要因として、【豊かさ】【望む生活】のほかに、社会関係資本である【人のつながり】、さらに、【生活設計】や【先行き見通し】を組み込んだ。本モデルが示唆する、アスピレーションと消費態度・行動に関する仮説として、以下の2つをあげることができる。1つは、お金の困らないことを生活の基本要件とし、身の丈の安心な生活を望むアスピレーションは、家計を圧迫する二大費目である教育関係費と住宅関係費に備える消費態度につながると考えられること。もう1つは、人と関わり、好きに使える時間を持ち、充実した生活を望むアスピレーションは、旅行・レジャー・つきあいや、趣味・自己投資の消費につながると考えられることである。

**キーワード**：アスピレーション、望む生活、豊かさ、社会関係資本、可処分時間、生活設計、経済面の不安、安心、充実、身の丈、グラウンデッド・セオリー・アプローチ、消費態度・行動

## 1. 問題と目的

消費意欲の低い若者が注目されてから10年以上が経つ。若者があまり消費しない、車離れ、酒離れ、地元志向、巣ごもり志向などを指摘する書物や新聞・雑誌の記事、評論が急増したのは、2000年代後半である。たとえば、山岡拓の『欲しがらない若者たち』（2009）、松田久一『「嫌消費」世代の研究—経済を揺るがす「欲しがらない」若者たち』（2009）などがある。山岡は、消費者向けのアンケート調査などで、〈欲しがらない若者たち〉の傾向が鮮明になり始めたのは、2005年頃のことだと指摘する（山岡 2009: 11）。

筆者が2000年代前半に行った研究で得た知見からも、若年世帯で消費アスピレーションが変化している様子が見えてくる（佐野 2004, 2005, 2006）。

アスピレーションは、「個人がより高い目標に到達しようとする要求のこと」（有斐閣『新社会学辞典』）であり、向上心や上昇欲求を意味する。本稿では、「手に入れたい消費生活」という目標に到達しようとする要求を〈消費アスピレーション〉と呼ぶ。消費アスピレーションの変化とは、要求の強弱の変化や、要求水準の高低の変化を意味す

るとともに、目標内容自体の変化を意味する。つまり、目標となる「手に入れたい消費生活」が変化しているということだ。

アスピレーションの対象が、「経済的、物質的な面でより豊かな暮らし」を手に入れることではなく、「身の丈に合った生活、より多くを求めない暮らし」に変わっているのではないだろうか。そのために、量的要求水準が低下したり、従来型の目標への要求が弱くなるという現象になって表れているのではないだろうか。

筆者が行った研究は、団塊ジュニアを中心とする1970年代生まれの世代を境に、暮らし向きについての態度が変化し、身の丈消費の傾向が強まっていることに着目している。団塊ジュニアより上の世代では、こうした傾向は見られない。団塊ジュニア世代は、高度経済成長が終わってから消費経験を積んだ初めての世代である。このことから、消費態度・行動の変化は、〈豊かさ〉の変化が影響しているという仮説をたてた（佐野 2004: 154-159, 169-170）。2000年代後半に山岡や松田が目にした〈欲しがらない若者たち〉は、1980年代後半から1990年代に生まれた世代だ。それよりも10歳以上年齢が上の団塊ジュニア世代から、変化の兆しは表れているようだ。

消費アスピレーションが変化する世代の先頭にいる1970年代生まれの団塊ジュニア世代は、現在40歳代になっている。子どもの教育費の負担と、自分たちの老後生活の不安をかかえるライフステージにある。自由に使えるお金が少ないステージにあっても、収入の増加や生活水準の向上への要求は低いままなのだろうか。

一方、右肩上がりの高度成長を経験し、経済面の上昇欲求や生活水準の向上を目指すという意味で消費アスピレーションが高かった世代は、今、退職年齢を迎えている。退職後の家計は、収入の構造が大きく変化する。また、子どもが独立する世帯が増え、消費構造も変わる。退職後の生活を送る上で、消費態度も変わるだろう。消費アスピレーションは高いままなのだろうか。それとも、質・量ともに変化するのだろうか。

情報化社会における消費環境の変化は、すべての年齢層、世代に影響が及ぶ。インターネット社会における情報技術革新がさらに進むことで、情報量は増え、情報の流れが変わり、市場のあり方が変わり、人のつながり方も変わる。諸々の変化は、消費生活に対する考え方、アスピレーションをどのように変化させるのだろうか。

本研究の目的は、現在の社会環境において「消費アスピレーション」の対象となる到達目標、手に入れたいと望む生活の内容を明らかにすることである。各世代、各ライフステージに共通する〈望む生活〉の構成要因を明らかにしたうえで、消費態度・行動との関連について分析し、アスピレーションと消費の関係を「望む生活と消費態度・行動に関するモデル」として提示する。

本研究では、アスピレーションと消費の関係について、概念モデルを構築することが目的であるため、質的研究方法をとる。個人に対する半構造化インタビューを行い、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA と略記）により、概念モデルを構築する。インタビュー調査の対象者は、多様な年齢層やライフステージ、世代から選んだ。対象者の属性の違いを踏まえた上で、〈望む生活〉概念の構成要因を浮かび上がらせるためである。

本稿は以下のように構成する。まず、研究の方法について、データ収集の方法と分析の方法について述べる（2節）。データ収集については、採用した質的調査の具体的な方法について、対象者の選び方、インタビュー実施の手続き、質問項目等の説明をする。データ分析については、本研究で採用した質的研究方法の一つである GTA の手法について概説した上で、データからモデルを構築する分析手順を説明する。次に、分析の結果を示す。分析により生成された概念をもとに仮説モデルを構築し、結果の考察を行う（3節）。最後に、総合的な考察を行い（4節）、本研究の限界と今後の課題を整理する（5節）。

## 2. 方法

本研究では、消費生活面のアスピレーションについて、その意味内容を明らかにすることを目的にしているため、質的調査を行った。おおまかな質問項目を決め、それに沿って半構造化インタビューを実施した。データ分析には、質的研究法の一つである GTA を用いた。この研究法は、「データから確認できる範囲内での説明モデルの生成」（木下 2014）を目的とするものである。本研究では、消費アスピレーションを捉えるために、〈望む生活〉概念をキーとするモデルの構築を目指しているため、この手法を採用した。

## (1) データ収集

### 1) 対象者

さまざまな世代や年齢層の人々が手に入れたいと思う生活を探るために、表1に示した8名を対象に半構造化インタビューを実施した。対象者はすべて子どもがいる既婚者である（子どもがすでに独立して家を離れている場合を含む）。筆者の個人的なつながりを通じて協力をお願いした2名と、個人的なつながりから紹介してもらった人6名である。

表1 インタビュー対象者一覧

A	女	31歳 学齢前の子ども2人
B	男	66歳 子ども結婚独立
C	男	31歳 学齢前の子ども1人
D	男	51歳 大学生と社会人の子ども1人ずつ
E	男	45歳 学齢前と小学生の子ども1人ずつ
F	男	39歳 小学生の子ども2人
G	女	43歳 高校生と大学生の子ども1人ずつ
H	女	60歳代後半 子ども結婚独立

対象者を子ども有り既婚者に限定したのは、単身世帯や子どもがいない世帯と比べて、家計構造が大きく異なり、〈望む生活〉も異なると考えられたからである。インタビュー対象者は、学齢前の子どもがいるステージ、小・中の子どもがいるステージ、高校・大学生の子どもがいるステージ、子ども独立のステージの各ステージをカバーした<sup>(1)</sup>。異なるライフステージや世代に共通する内容に注目するためである。

### 2) 実施手続き

実査は2015年7月から9月にかけて、対象者一人につき1時間半程度のインタビューを行った<sup>(2)</sup>。インタビューは、大学内の研究室や応接室、あるいは対象者が経営する店舗事務室を利用した<sup>(3)</sup>。インタビューに先立ち、研究趣旨を述べた研究協力依頼書、研究倫理遵守に関する誓約書、承諾書、ならびに承諾撤回書を調査対象者に渡し、説明を行った。対象者から調査協力の承諾を得た後、インタビューを開始した。インタビュー内容は、対象者の許可を得た上でICレコーダーで録音し、文字起こしにより音声データから文字テキストデータに変換した。

インタビューでは、最初に、景況感やお宅の暮らし向き、家計費目別の支出意欲、お金をかけたいモノ・コトに関する簡単なアンケートに答えてもらった。その後、以下のおおまかな質問項目について、1対1のインタビューを行った。

- ・欲しいものや、やりたいことはあるか？ お金があれば何に使いたいのか？
- ・どんな暮らしをしたいか？ 手に入れたい生活はどのようなものか？
- ・豊かさとは？
- ・よそのお宅と比較することはあるか？ 「世間並み」「人並み」を意識するか？

なお、実際のインタビューでは、上記最初のトピックスから開始することについてはすべての対象者に共通だが、あとの流れは、対象者の語りに応じて柔軟に対応した<sup>(4)</sup>。

## (2) データ分析

分析に用いたデータは、インタビューで語られた言葉を逐語的に文字に起こしたテキストデータである。この文字テキストデータをもとに概念を生成し、生成した概念をカテゴリーに統合し、カテゴリーを相互に関連付けた概念モデルを構築するという手法をとった。

文字テキストデータは、まず、インタビュー対象者の個々の社会的文脈において読み解かれ、そこから、まとまり

のある意味の単位として、文書セグメントが切り出される。同じような意味を持つ文書セグメントは、一つの概念のバリエーション（具体例）として位置づけられ、概念名がつけられる。それぞれの文書セグメントは、もとの文脈から切り出されることによって、個々の対象者の社会的文脈に依存しない、脱文脈化されたデータとして、その後の分析の材料となる。脱文脈化されたデータは、概念生成、カテゴリーへの統合、モデル構築の各段階において編集され、再文脈化が行われる。

なお、本分析は、木下康二が提唱する修正版グラウンデッドセオリー・アプローチ (M-GTA と略記) に基づきつつ、佐藤郁也の質的データ分析法の考え方を参考にした<sup>(5)</sup> (木下 2007; 佐藤 2008)。分析の手順を以下に示す。手順の説明に用いる用語は、木下、佐藤の使用法に準じた。

### 1) 概念生成 —ラベル付け—

GTA では、継続的比較分析が分析の中心となる。したがって、分析の第一歩は、文字テキストデータから、比較のための材料を生成することである。

まず、文字テキストデータから、最初の比較材料を創るために、分析テーマに照らして一つの意味のまとまりとして切り出し可能な箇所を探す。データを切片化するのではなく、元の文字テキストの文脈を重視して、一つ概念としての意味解釈が可能な文書セグメントを切り出す。このセグメントが、生成する概念の最初のバリエーションとなる。

データから説明概念を生成する作業は、GTA でコーディングと呼ばれる。データを細かく区切る「切片化」という方法でコーディングし、たくさんのラベルが作られたら、それらを継続的に比較していくのが GTA の手法である。これに対し、木下の M-GTA では、「データの切片化ではなく、あくまで自分の選択的判断としてデータのある部分に着目する」やり方を重視する (木下 2007: 191)。佐藤もまた、「文書セグメントがおかれている元の文字テキストの文脈を重視する」方法をとる (佐藤 2008: 192)。本分析では、木下や佐藤の考えに準じ、もとの文脈を重視して意味を解釈する方法をとった。キーワードやキーセンテンスに注目した概念生成にならないように注意した。

切り出した文書セグメントは、生成する概念の最初のバリエーションとして、分析ワークシートに取り込んだ (実際には電子ファイルを使っただけの作業なので、もとのテキストファイルからセグメントをコピーペーストするだけ)。分析ワークシートは、概念ごとに分けて作成するもので、M-GTA の技法である。木下は、分析プロセスを明示することを目的に、概念生成時には必ず分析ワークシートを各概念で個別に立ち上げ、生成した概念の名称と、その定義、最初のバリエーション、分析メモを書き込むことを提案している。

実際の概念生成時の分析ワークシートでは、最初のバリエーションとした文書セグメントの意味内容を要約し、それを暫定的な「定義」とした。また、文書セグメントの意味内容を一般的な言葉に置き換えたラベルを考え、それを暫定的な「概念名」とした。

生成された概念は、その後の比較のための材料となる。比較の結果、さらに新たな概念を生成した場合には、新たな分析ワークシートを立ち上げた。比較の結果、同じ概念のバリエーションと解釈した場合には、既存のワークシートに追加するという作業を行った。

### 2) 概念の修正

概念は、バリエーションが増えることで、抽象度を増す。必要に応じて、概念と概念を比較しつつ、概念の分割や統合を行い、概念の定義や名称の修正を行った。概念を修正する際は、バリエーションとした文書セグメントの元の文脈に立ち回り、「データにもっともフィットする概念に仕上げていく」 (木下 2007: 195) ことを心掛けた。概念の生成や修正の際には、演繹的アプローチと帰納的アプローチを併用した。

### 3) カテゴリーへの統合と概念モデルの構築

概念間の関係を比較検討することで、概念のまとまりを創り、カテゴリーの生成を行った。さらにカテゴリー間の関係を比較検討することで、概念モデルを構築した。テキストデータ、概念、カテゴリー、概念モデル、それぞれの

レベルで、あるいはレベル間で、比較検討を繰り返しながら、概念やカテゴリーの適合性を判断し、修正を加えた。さまざまなタイプの比較を繰り返す中で、それぞれの関係の入念な分析を行っていくのが、GTAの特徴である「継続的比較法」である。

最終的な概念モデルが出来上がったら、分析結果を概念とカテゴリーだけで簡潔に文章化したストーリーにまとめる。データ分析の最初に、個々の対象者の発言から脱文脈化したデータは、概念生成とカテゴリー化、さらにモデル構築によって、ひとつのストーリーに編集され、再文脈化される。

### 3. 結果と考察

分析の結果、25の概念と、8のカテゴリーが抽出された。概念とカテゴリー名は表2に示す。いくつかのカテゴリーをまとめて上位カテゴリーにしたものもある。カテゴリー同士の関連をモデル図にまとめたものを図1に示す。まず、図1のモデルについて、全体像を説明し、続いて、各カテゴリーについて詳述する。文中、概念は [ ]、カテゴリーは 【 】 で表示する。【】は、複数のカテゴリーを1つにまとめた上位カテゴリーを表す。

表2 概念とカテゴリー

カテゴリー名	概念名	定 義
望む生活	安心した生活	安心した生活を送れることが目標。何かあった時に困らない程度のお金があることが重要。一方で、お金がありすぎることは不安。
	身の丈の暮らし	自分にあった生活。衣食足りていればそれ以上求めない。もっと欲しいから頑張ろうという気持ちはない。
	充実した生活	時間の余裕があり、バランスのとれた使い方ができている。自分が好きなことをできる時間を持つ、人と関わり、役立ち感を持てる喜び、楽しさを感じる。
豊かさ	お金に困らないこと	豊かさのベースになるのは、お金に困らないこと。
	好きに使える時間	自分がやりたいことに時間が使えること。楽しんで暮らす。
	人との関わり	社会とのつながり、人脈。人の役に立てる、必要とされている、人から認められているという精神面の喜び、満足。
お金の使い道	お金は使いたくない	欲しいものは特にない。お金は使わない・使いたくない。
	やむを得ず、どうしても欲しいものだけ買う	壊れて買い替えざるを得ない場合、旧式になって買い替えたほうが安くつく場合にだけ買う。あるいは、便利で生活が楽になるなど必需感の強いもの、どうしても欲しいものだけ買う。
	何か欲しくなる	新しいものが欲しくなる。漠然と「欲しい」という気持ちがある。
	グレードアップしたい	お金があれば、今持っているもの、やっていることのグレードアップをはかる。
	自分の趣味や自己投資	自分の趣味に使ったり、自己投資に使う。
	旅行・レジャー・つきあい	家族や友人との旅行・レジャー・つきあいにかかる費用。
	子ども・孫のため	学校や塾・習い事等の教育費。
貯蓄・支出態度	家	持家の取得、家のリフォーム・増改築など。
	貯蓄意欲	貯蓄していると安心。不安だから貯蓄。
	慎重・堅実	本当に必要な支出かどうか、無駄使いでないかどうか、よく考える。
支出行動	計画性	将来を考えて、今のお金の使い方と貯蓄を考える。
	節約・やりくり	切り詰められるところは切り詰めて、家計をやりくりする。
	比較購買	同じようなものなら安く買える所を探す。ちゃんと比べて納得して買う。
生活設計	リサイクル・シェア	新品でなくてもいい。友人や親戚で使い回す。
	資金計画	退職後／老後の生活設計や資金計画を考える。
先行き見通し	転機	子どもが生まれ、成長、独立、自身の退職、家族のライフイベントを契機に家計構造が変化。
	経済面の不安	毎日の生活で感じる経済面の不安。
人のつながり	家族や親とのつながり	配偶者や子供など家族とのつながり、親とのつながりと消費。
	友人・知人とのつながり	学校・職場・地域の友人とのつながり、ネットワークを形成し維持することの重要性。

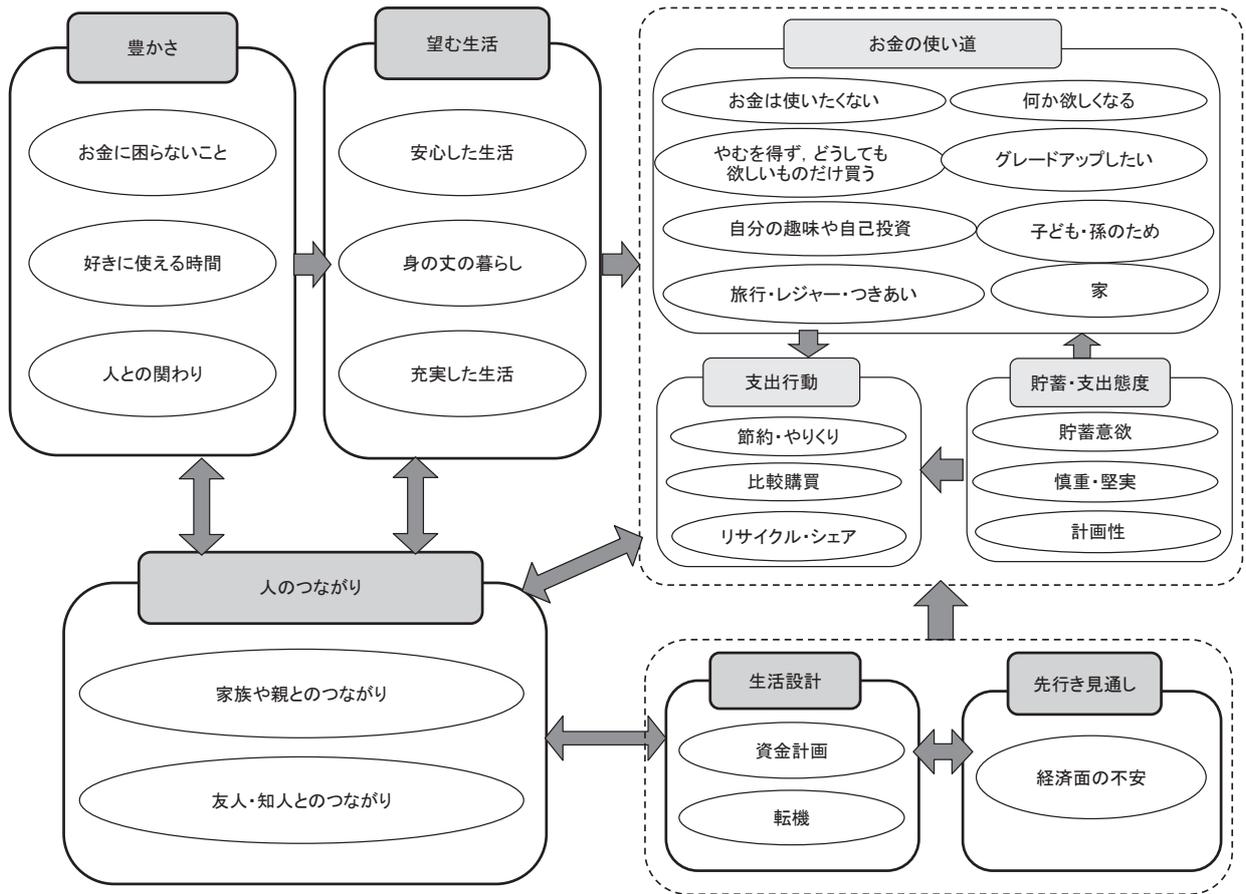


図1 望む生活と消費態度・行動に関するモデル

(1) 全体像

消費アスピレーションの対象を【望む生活】として、全体像の中心に据える。【望む生活】を構成するのは、生成した3つの概念〔安心した生活〕〔身の丈の暮らし〕〔充実した生活〕である。生成した概念の内容を考察すると、現代の消費社会におけるアスピレーションは、消費の質・量においてランクアップを目指すという要求の次元だけでなく、「身の丈の安心感」という消費生活の持続可能性を目指す、異次元の要求が出てきていることがわかる。また、後者の比重が増しているのが、現代の消費社会の特徴だと考えられる。

【望む生活】は、【豊かさ】についての見方を背景にする。【豊かさ】を構成するのは3つの概念、〔お金に困らないこと〕〔好きに使える時間〕〔人との関わり〕である。過不足ない経済基盤を消費生活の基本要件にして、〈可処分時間〉と〈社交〉のバランスのとれた内容がプラスされることが、〈豊かさ〉を生み出していることがうかがえる。

【豊かさ】を背景にした【望む生活】は、【消費態度・行動】を規定する。【消費態度・行動】は、【お金の使い道】【支出行動】【貯蓄・支出態度】の3つのカテゴリーをまとめた上位カテゴリーである。

【お金の使い道】を構成する概念は、〔お金は使いたくない〕を含めて8つが生成された。「お金があったら何に使いたいかな?」と尋ねることで、【望む生活】を手に入れようとする要求—消費アスピレーション—が、どのような具体的支出に結び付くのかを明らかにしようとした。生成された概念のうち、〔自分の趣味や自己投資〕〔旅行・レジャー・つきあい〕〔子ども・孫のため〕〔家〕の4つは、充実させたい支出分野が具体的に示されたものである。〔やむを得ず、どうしても欲しいものだけ買う〕〔何か欲しくなる〕〔グレードアップしたい〕という、支出分野が特定されないものも多かった。

【貯蓄・支出態度】を構成する概念は、〔貯蓄意欲〕〔慎重・堅実〕〔計画性〕の3つが生成された。【支出行動】を構成する概念は、〔節約・やりくり〕〔比較購買〕〔リサイクル・シェア〕の3つが生成された。

【お金の使い道】【支出行動】【貯蓄・支出態度】で構成される【消費態度・行動】は、【豊かさ】や【望む生活】の

影響を受けるだけでなく、【人のつながり】や【生活設計】・【先行き見通し】の影響を受ける。ライフイベント（子どもの出生、学齢期、独立、そして夫婦の退職期といった家族のライフステージを特徴づける様々なイベント）をきっかけに、消費生活は〔転機〕を迎え、〔資金計画〕を練りなおしながら、【生活設計】を見直す。【生活設計】に大きく関連するのが〔経済面の不安〕を主とする【先行き見通し】である。消費の質・量のランクアップを目指すより持続可能性を目指す消費アスピレーションには、長期的視野で生活設計をたて、家計を運営する態度が必要となるようだ。

【お金の使い道】の〔子ども・孫のため〕は、主に教育費関係の支出、〔家〕は戸建て取得や持家のリフォーム・改築にかかる支出である。持続可能な生活を手に入れたいと考え、長期的視野で生活設計をたてようとする態度と関連する消費支出である。また、【支出行動】の〔節約・やりくり〕や【貯蓄・支出態度】の〔貯蓄意欲〕なども、持続可能性へのアスピレーションに関連した態度・行動とみることができよう。

一方、【望む生活】の〔充実した生活〕の側面では、人と関わることで得られる豊かさを望むことが、〔旅行・レジャー・つきあい〕にお金を使うことにつながると考えられる。〔人との関わり〕という【豊かさ】の側面や、実際の【人のつながり】は、【支出行動】の〔リサイクル・シェア〕にも関係する。親戚や友人同士で必要なものを使い回すというもので、人のつながり、ソーシャルネットワークが必要となる消費スタイルである。人との関係性を含めて持続可能な暮らし方を目指すアスピレーションは、資金計画を必要とする教育関係費や住宅関係費の重視、つながりのための社交費の重視、そしてリサイクルやシェアというネットワーク消費行動につながっていると考えられる。

## (2) モデルを構成するカテゴリー

### 1) モデルの中心概念 — 【望む生活】と【豊かさ】

#### ① 【望む生活】

理想とする消費生活、手に入れたい消費生活としての【望む生活】には、消費アスピレーションの達成目標となる暮らしのイメージが表れる。データから生成された概念は、〔安心した生活〕〔身の丈の暮らし〕〔充実した生活〕の3つである。金銭面や消費の質・量の側面で向上させていく目標がデータから生成されることはなかった。何かあった時に困らない程度のお金を持っていることは重要だが、身の丈にあった、過不足のない暮らしを良しとする。そうした経済生活を基本に、バランスよくいろいろなことに時間を使うことができ、人と交わる、そのような充実した生活を持続することが理想になっているようだ。

〔どんな暮らし方が好き？<sup>(6)</sup>〕うーん、安心した生活？〔安心って？〕えっと、まあお金の面でいうと、貯金できて、プラス自分たちの好きなこととかもできる余裕が少しある、というのが理想的で。今はそれに近い生活ができるかな、という感じです。〔少しの余裕でいいの？〕うーん、できれば、まあ結構あった方がいいですけど。なんかそうすると、なんかちょっと変わってっちゃうのかな、という気持ちもあるので。やっぱり、お金があり過ぎても私には逆に不安になってしまうので。ちょうど今くらいの生活が、自分にあっているのかなと思います。(Aさん)

まあ衣食住は足りていれば、後はそれ以上多くを求めないで。むしろ、あの、自分が役に立てる、(中略) お金に替えがたい充実さというんですかね。(Bさん)

#### ② 【豊かさ】

理想とする消費生活である【望む生活】のイメージは、その人が持つ〈豊かさ〉のイメージと大きく関わると考えられる。その〈豊かさ〉を構成する概念として生成されたのが、〔お金の困らないこと〕〔好きに使える時間〕〔人との関わり〕である。

〔お金の困らないこと〕は、〈豊かさ〉の基本要件となっており、それにプラスして充実した時間や社交が〈豊かさ〉につながっているようだ。

豊か…まず余裕、ですよ。〔余裕というのは〕まあ金銭面と、あとは気持ち。心の面の余裕。豊かさって聞くと、そのイメージが強いですね。(中略) こう時間に余裕が出て、自分が気持ち的に充実してるなって思えることができて、そうすると、それがまた余裕につながる、とは思います。(Cさん)

〔どんなことを豊か、と感じるか?〕人が好きなので、みんなでああ集まって、いろんなものを吸収しあいながら、コミュニケーションをとってられるっていうことは、すごいことだと思いますし。(中略) アナログ的な付き合いをもって、人と接し、いろんなものを吸収しながら。昔に戻ればいいなあ。昭和の時代に戻った方が、人間的には豊かさを感じるかな、と。モノはつまんないですからね。高い物買った、あれ買った、あれも手に入ってたって言っても、そこに豊かさは、僕は感じない派です。(Eさん)

豊かさは、まずお金に困らない。で、ある程度、なんていうんですかね、時間があって、まあ、好きなことをする時間がある。ちょっと漠然としてますけど、そういうことかなって思いますね。(Fさん)

【豊かさ】を構成する〔人との関わり〕の要素については、ネットワークの広さ・深さという社会関係資本、人脈の側面と、人から「認められる」「必要とされる」「喜ばれる」といった、関係がもたらす効用の側面が、ともに、〈豊かさ〉につながっているようだ。

世の中、物質的な豊かさを豊かという人があるとは思いますが、私は全然それを豊かだとは自分で思っていないので。あの、人との関わりが楽しいこと、っていうのが、私は自分が豊かに感じる、(中略) 人脈っていうかな、(中略) 100%自分が知っていることばかりじゃないわけだから、そういう人たちから、うんといろんな情報をいただいたり、うん、それは自分にとっての豊かさになる。(Hさん)

〔豊かさって?〕そうですね、まあ生活を楽しむ、それも消費だけの生活ではなくて、少しはあの、生産、生産性というほど立派なものではないですけど…。例えば今やってるのは、ボランティアやってるんですけど。(中略) 自分がその必要とされているかどうかは、こうただ待っていても必要とされないから、自分でそういった組織に入って、(中略) 人から認められるってことは、とても人生にとって大事なことなんで。(Bさん)

消費のリソースとして重要なのは、お金、時間、人のつながり(社会関係資本)、情報だと考えられる。高度経済成長期は、金銭面のリソースが重視されたが、現代は、すべてのリソースをバランスよく持てることが〈豊かさ〉になっているようだ。

## 2) 【消費態度・行動】

消費態度・行動に関連する概念は、【お金の使い道】【支出行動】【貯蓄・支出態度】の3つのカテゴリーにまとめた。

### ① 【お金の使い道】

「お金があったらどんなことに使いたいか?」「欲しいものや、したいことはどんなことか?」といったインタビューでの問いかけをきっかけにした発言データから生成された概念は、8つにのぼる。

1つ目は、[お金は使いたくない]である。[お金は使いたくない]は、主に、物を買うことにお金を使いたくないという内容である。持っていない物であっても、生活を便利にするような物であっても、「あまり買いたいとは思わない」。「今ある物が壊れたら買い替えるけど、そのくらい」。あるいは、「壊れたらもう買い替えずにそのままでもいい」という意見もあった。

〈豊かさ〉と〈望む生活〉

どちらかという、お金とかあまり使いたくないというか、できれば貯めていたいタイプなんで。(Aさん)

まあ物は全部、全部揃ったっていうのはわからないですけど、自分としてはもう特に、これから買い足したいとか、買い替えたいというのは、今のところはないですね。(Bさん)

2つ目は、[やむを得ず、どうしても欲しいものだけ買う]である。物欲はほとんどないし、お金は使いたくないが、どうしても必要な物、欲しい物は積極的に手に入れるという考え方だ。何でも欲しがる、どんどん手を出すという消費スタイルより、厳選消費のスタイルの方に豊かさを感じる向きもあるようだ。

音楽聴くのが好きなんで(中略)新聞屋さんとか、それから先輩なんかから券をもらえたりするので、そういうのはもう有効活用させてもらって、で、どうしても見たいものだけは、自分でお金を払って見ていると、そういう生活ですが、割と自分にとっての豊かな生活…。(Bさん)

3つ目は、前2者とは異なり、[何か欲しくなる]という内容である。ただし、具体的な欲しいものがあるというわけではない。物を所有することに対する欲求というより、目先を変える欲求を満足させたい、「欲しい」と思う自分の気持ちを満足させたいという点が強いと考えられる。

漠然と、欲しいなという形で、ただその何が欲しいかっていうのを、今こう見極めたり探したりっていう、時間がちょっと取れていないので、そこも含めて、ちょっと欲しいなっていうところはあります。(Cさん)

新しいのが欲しいという感じですね。今の嫌というよりは、新しいのが欲しい、ええ。(中略)新しいのを買ったっていう満足感ですかね。(Fさん)

4つ目は[グレードアップしたい]である。お金があったら、いつもの消費のランクアップを図りたいという欲求である。

もしお金ができれば、それこそ何とかフィットネスみたいな所で、ちゃんとして通いたいとか[今は、1回600円で利用できる区のスポーツ活動に参加]。あとは、コンサートも、1年に1回くらい行くだけでも、なんかそういうのでも、ちょっとあのなんていうのかな、何回かでも年に行けるといいかなとか。外食も、あの今できていない状況、まあしてますけど、そんなに頻繁ではないので、お友達とあの、それこそ1000円以下のワンコインランチじゃなくて、ちゃんとしたあのレストランで食べ…、なんにも考えずに食べたいな、とか。(Gさん)

5つ目以降は、[自分の趣味や自己投資][旅行・レジャー・つきあい][子ども・孫のため][家]と、お金の使い道が具体的である。

【望む生活】【豊かさ】からうかがうことができる「自分がやりたいことに時間が使え、楽しんで暮らす豊かさ、充実した生活を手に入れたい」「人の関わりに豊かさを感じ、社交がもたらす喜びや楽しさを生活に求めたい」という消費アスピレーションは、[自分の趣味や自己投資][旅行・レジャー・つきあい]という使い道に向かうと考えられる。

自分の好きなことに時間とかお金を、少しずつ使おうかなと。(中略)自分自身にも、投資じゃないですけど、お金を使って、まあ楽しみたいな、というのがあったんで。(Dさん)

一方、[子ども・孫のため]は、学校や塾・習い事などの教育関係費が中心で、単発の支出というより、長期間継

続して必要となる支出である。金額も大きいので、計画的な準備、対応が求められる支出である。持続可能な生活を指すなら、「子ども・孫のため」支出は、他の費目に優先して対応したい費目だと考えられる。

[家]も、教育関係費と同様、必要となる金額が大きく、計画的な対応が必要となる費目である。[家]については、大きく2つの目的が浮かび上がった。1つは、周りを気にしないで小さい子どもを育てられる環境としての戸建てを望むものである。もう一つは、老後の生活設計も含めて、現在の持家を改築改修したいと望むものである。いずれも、これからを見越した長期的視野でのお金の使い道である。

やっぱり小さいから、やっぱり歩くのもうるさいんですよ。(中略)普通に生活していることで、何か文句を言われるというのが、やっぱりこういう集合住宅ならではあれなのかなと思って。近所づきあいでもないですけど、なんかそういうのがちょっとやだな、というので。で、戸建てだったら、自分たちで好きなように、足音も、ほんと大声とか出さなければ、きっと隣りの人とかにも聞こえないだろうし、そういうので、戸建てはいいよねという。(Aさん)

おうちは、ちょっとあのリフォームしたい、将来的にね。(中略)[子どもが]一緒に住んだったら、何世帯が多くなるから、リフォームは彼らが結婚してからじゃないと考えられないな、とか。(Gさん)

## ②【貯蓄・支出態度】

貯蓄と支出の配分に関する態度については、[貯蓄意欲][慎重・堅実][計画性]という3つの概念を生成した。

[貯蓄意欲]に見られる貯蓄の目的は、子どものため(主に教育)と自分たち夫婦の老後のため、がほとんどだ。対象者のライフステージによって、若年層では、子どものため、中年以降になると、自分たちの夫婦の老後のためという目的が多くなる。ただ、貯蓄しようと思っているが、毎日の家計の切り盛りでなかなか手が回らないという現実も見える。

今足りない分の、子ども用の貯蓄[学費以外で、子どもがやりたいと思うことに対する費用]を、もう少しこれから伸ばせればいいなと思うんですけど、なかなか余分なお金っていうのは貯まらないうすよね。(中略)日々追われ、そこまでの貯蓄はできないというのが、現状ですね。(Eさん)

子どもの面倒にならないようにって思うと、(中略)やっぱりお金を貯めたいなっていう。(Gさん)

なお、[貯蓄意欲]については、対極の考え方もあった。「楽しく充実した生活を目指す」という消費アスピレーションからは、「持続可能な生活を目指す」ことを優先する堅実な貯蓄・支出態度につながる場合と、「今を楽しめる生活を手に入れる」ことを優先する享乐的な態度につながる場合とがあるようだ。後者の場合は、楽しい生活を送るために仕事をしているのだから、稼いだ金を使わずに貯めるくらいなら、稼ぐために費やす時間を減らしたほうが良いという考えがうかがえる。

なんのために働いているかっていうと、やっぱり生活するためですよ。楽しいことするためですよ。生きてるだけじゃなくて。(中略)例えばね、バイトで10万稼いで3万貯金するんだったら、7万分くらいの時間しか働かなければいいのにな、そっちの方が楽なのにな、って思ってます。(Fさん)

[慎重・堅実]についても、対極的な内容があった。意思決定に慎重になって時間をかけて比較、熟考する時間をもつたいないという考えである。

2時間悩んだら、即決して違うことやれば良いのになって。(中略)微々たるお金の差だったら、時間の

方が大事だな、って思いますけど。(Fさん)

【計画性】については、ある程度計画的な家計運営が必要であるという一般的な認識がみられた。ただ、「あまり将来を気にしすぎて、楽しさまで削るのはいや」という気持ちも共通している。

将来を気にしてということはしたくないので、やはり無駄じゃない範囲で欲しい物は買って、欲しいなと思ったものは、手に入れて、という形ではやっていきたい。(Cさん)

### ③【支出行動】

支出行動に関連する概念として、【節約・やりくり】【比較購買】【リサイクル・シェア】の3つを生成した。

まず、【節約・やりくり】は、【慎重・堅実】な消費態度が行動に表れたものと見られる。ただ、引き締めすぎのもの、生活の楽しさが失われるので、ほどほどにバランス重視の姿がうかがえる。

もうちょっと貯蓄に回したい、気持ちはあるんですけど。(中略)あんまりふだんの生活ギュッと締めても、家庭全体のためによくないのかな。そのバランスが、一番難しいですね。(Eさん)

【リサイクル・シェア】は、新品であることに拘泥しない態度と、実際の行動の両方を含む。親戚や友人・知人間での商品の使い回しは、子供用品が中心だが、大人用の商品でも行われている。長く使えるものを次代につなぐという意識も浮かび上がった。

洋服が小ちゃくなって着れなくなったからって、グルグル回してるのはありますけど。あのリサイクルショップへ行ってお金出して、あの取って中古品を買ってくるってことは、現状ではしてないですね。いとこ兄弟、まあ近所の友だちと、ちょうどやっぱり同じ世代の、年代がくつつくんで、その中で、うちのこんなの要らなくなったけど、いる？とか、そういうのはよくやっていますね。(Eさん)

こういう着物を【孫に】着せても、何一つ買った物は1個もない。全部お古の物を。(中略)そういう風に物を大事にするっていうのが、私はすごく好きで。(中略)物に対する欲は全くないんですけど、あの、そういうことだけは、つないでいきたいなあという思い【物を大事にするという価値観とともに、物自体も、次の世代につないでいきたい】ですね。(Hさん)

## 3) 生活設計と先行き見通し

【お金の使い道】や【貯蓄・支出態度】【支出行動】といったカテゴリーで構成される【消費態度・行動】は、【先行き見通し】や【生活設計】の影響を受ける。身の丈の暮らしで、安心と充実の生活を目標にするには、これからの見通して資金計画をたてて家計を運営することが重要だ。

### ①【生活設計】

【転機】と【資金計画】の2つの概念を生成し、【生活設計】というカテゴリーにまとめた。家計は、ライフステージによって収入構造や支出構造が大きく異なる。子どもが生まれることによって、乳幼児向けの用品やサービスが必要となる。子どもの将来を考えた貯蓄も意識するようになるだろう。子どもが学齢期になり、高校・大学生になれば、教育費の家計への負担はピークに達する。同時に、子どもが独立した後の夫婦の老後に対する備えも意識するようになるだろう。住宅についても、かかる費用が大きいだけに計画的な行動が必要となる。家族のライフイベントをきっかけにステージが変わるたびに、消費行動、貯蓄行動は転機を迎える。その折々の経済面の不安を反映しつつ、資金計画がたてられ、生活設計の調整が行われているようだ。消費態度・行動は、望む生活を手に入れることを目指す消

費アスピレーションと、先行き見通しや生活設計の双方の影響を受けると考えられる。

〔転機〕については、子どもの出生と本人の退職の2つが大きいようだ。この二大転機が、今後の〔資金計画〕を練り、生活設計の調整や消費行動の見直しを図るきっかけとなっているとみられる。

やっぱり一人暮らしの時の理想と、家族ができてからの理想が、全然変わってきてしまったので。(Cさん)

会社の中でライフ何とかセミナーってあるんですよ。その、第二の人生設計をするような、あのセミナーみたいなものが50代になると受けられて。でやっぱりその、これから入ってくる所得とか、定年後にもらえる年金とか、そういうのをシミュレーションして、どうやって人生設計していきますかって。まあ私も受けたんですけど、やっぱりそういうのを受け始めると、やっぱり考え方変わっていくと思うんですよ。(Dさん)

## ②【先行き見通し】

データから生成した概念は、〔経済面の不安〕である。【消費態度・行動】は【豊かさ】や【望む生活】という、その人の価値観に大きく規定されるが、同時に、それぞれの家計を取り巻く環境をどのように認識・評価するかという【先行き見通し】によっても規定される。〔経済面の不安〕は、先行き見通しとして、家計運営を慎重にさせ節約行動に向かわせているようだ。ただし、不安感の強くない人、あるいは、過去に経済面の難局を乗り切った経験のある人は、「なんとかなる、現状維持できる」と判断することもあるようだ。

老後、二人とも働けなくなった時に、その時にちゃんと貯金があって、年金がもらえてっていう確実な保証がないので。(Aさん)

リーマンショック、あの前後というか、あそこから1年2年くらいが、会社も実は非常に厳しい状況だったんですね。まあ、まあちょうどその頃は、子どもが一番学費がかかったもんですから、非常にやっぱり生活も、自転車操業というか、厳しい状況でしたね。まあそこを乗り越えたという、自信じゃないですけど、乗り越えられたってところは、一つ、まあ先々不安がゼロじゃないと言いつつも、まあ何とかかなるかなと、はい。(Dさん)

## 4)【人のつながり】

〔家族や親とのつながり〕〔友人・知人とのつながり〕という2つの概念を生成し、【人のつながり】というカテゴリーにまとめた。【人のつながり】は、【豊かさ】【望む生活】という価値観や消費生活目標に関連し、また、【消費態度・行動】や【生活設計】にも関連する。【人のつながり】は社会関係資本であり、金・時間・情報とともに、消費のリソースとして重要である。

〔定年退職後〕やはり地域にそんなにあの現役時代から友だちがたくさんいたわけじゃないので、地域デビューということには相当力を注いだり、まあ先程の、自分が住んでいる地域の大学、老人大学とかシルバーセミナーみたいなところに行って、で友だちの輪がどんどんどんどん広がるように、努力して。(中略) ちょうど「ライフプラン50」っていう、50歳になった時に会社でそういう心の持ち方みたいなセミナーというか、講習をやってくれたので、それに参加したら、ああお金だけじゃなくて、そういった人生設計ってしておかないと。(Bさん)

## 4. 総合的考察

本研究では、現代の消費者が手に入れたいと望む消費生活について考察してきた。〈豊かさ〉についての考え方を反映した〈望む生活〉の内容を明らかにし、消費態度・行動との関連をモデル化した。

現代の消費者にとって、〈豊かさ〉とは、「お金に困らないこと」を基本要件に、好きに使える時間があり、楽しん

で暮らせること。そして、人と関わり、学び合えることの喜びや、人から必要とされ、認められるという喜びが感じられることだと考えられる。

一方、〈望む生活〉は、身の丈の、安心した生活が続けられること。そして、時間の余裕があり、バランスのとれた使い方ができていること。人と関わり、人の役に立てる喜びや楽しさを感じる充実した生活であることがうかがえる。

金・時間・人（社会関係資本）・情報は、消費のリソースとして重要なものである。これらのリソースをバランスよく持っていることが〈豊かさ〉につながり、〈望む生活〉となっているようだ。

現代の消費者が、豊かさを感じ、手に入れたいと望む生活—4つの消費リソースのバランスがとれた生活—、そうした消費生活を目標とする現代版消費アスピレーションは、消費の質・量においてランクアップを目指す要求というより、過不足ないバランスのとれた持続可能な生活を目指す要求になっていると考えられる。

ジュリエット・B・ショア（2010=2011）は、「プレニテュード（plenitude）」という表現を使い、「新しい〈豊かさ〉」について論じている。ショアは、「〈豊かさ〉に関する個人の原理は、労働と消費を減らし、創造と絆を増やすことである」と指摘し、個人の観点から〈豊かさ〉の基本原則を4つ挙げる（Schor 2010: 4-7=2011: 3-6）。第一の原理は、労働市場や消費市場で費やす時間を削減し、自分の時間を取り戻し、人とつながる機会を増やすこと。第二の原理は、高い生産性に支えられた自給—家庭内供給—への転換をはかること。第三の原理は、低コスト、低負荷で高満足な消費生活を発展させること。第四の原理は、コミュニティと社会的なつながりの再活性化である。

ショアが論ずる「新しい〈豊かさ〉」の説明には、時間、人（社会関係資本）、バランス、持続可能性（サステナビリティ）という言葉が多用されている。本稿でまとめた研究結果と通じる内容である。

本研究では、分析結果に基づき、「望む生活と消費態度・行動に関するモデル」を構築した。モデルでは、消費態度・行動に影響する要因として、〈豊かさ〉〈望む生活〉のほかに、社会関係資本である〈人のつながり〉、さらに、〈生活設計〉や〈先行き見通し〉を組み込んだ。〈生活設計〉や〈先行き見通し〉は、持続可能な「安心・充実・身の丈」の生活を望む上で必要な要因であると考えた。各要因それぞれが、相互に関連しながら、お金の使い道や支出行動、貯蓄・支出態度に、特徴的な影響を与えている様子が浮び上がった。

お金の困らないことを生活の基本要件とし、身の丈の安心な生活を望むアスピレーションは、家計を圧迫する二大費目である教育関係費と住宅関係費に備える消費態度につながる。そして、人と関わり、好きに使える時間を持ち、充実した生活を望むアスピレーションは、旅行・レジャー・つきあいや、趣味・自己投資の消費につながる。

本稿の冒頭、問題提起として「欲しがらない若者たち」について言及した。また、団塊ジュニア世代以降の、高度経済成長後の低成長下に育った世代で、身の丈消費の傾向が見られることを指摘した。団塊ジュニア世代は、今や中年の域に達し、もはや若者とは言えない年齢になっている。

今回の分析結果が示唆するのは、人びとの〈豊かさ〉の捉え方が変わってきたと考えられることである。1970年代初め頃までの高度経済成長下の〈豊かさ〉観は経済的側面に偏っていたが、1980年代に入って、時間のゆとりが〈豊かさ〉の重要な要因に浮上した<sup>(7)</sup>。2000年代に入ると、インターネット社会の急速な進展とソーシャル・メディアの普及に伴い、人との関わりがもたらす〈豊かさ〉が注目されるようになる。現在は、様々な要素のバランスを考えた持続可能性の重視に変化しているようだ。「新しい〈豊かさ〉」は、〈望む生活〉を変化させる。望む生活が変われば、消費態度や行動も変わる。現代版消費アスピレーションは、安心で充実した持続可能な生活を手に入れることに向かっていると考えられる。現代の消費者の行動は、そうした要求の充足に対応するものになっていると考えられるだろう。

## 5. 今後の課題

本研究では、〈望む生活〉と消費態度・行動に関する概念モデルを構築した。〈豊かさ〉〈望む生活〉の内容を質的調査に基づいて探ることにより、描き出した仮説モデルである。これまで、豊かさに関する論考はたくさんあったが、質的データに基づいて分析したものは、筆者が知る限りほとんどないと思われる。今回、GTAを用いることで、データに基づくモデル構築ができたことは意義があると考えている。

ただ、本研究は概念モデルの構築を目的に質的研究を行ったので、手法上、得られるデータの限界がある。今後は、量的研究を利用しつつ、研究を深めていきたい。ここでは、今後の研究課題として、以下の2点を取り上げておく。

まず1点目は、所得額や貯蓄額の違いが、モデルを構成する要因間の関連にどのような影響を与えるのかを分析することだ。今回は、対象者の所得や貯蓄について調査していない。インタビューの対面状況で、所得を尋ねるのは難しいからだ。しかし、消費の最大の規定因が所得であることを考えると、本研究で構築したモデルを現実の消費行動レベルにあてはめるには、所得や貯蓄の影響を調べる必要がある。

2点目は、消費分野ごとに、〈豊かさ〉や〈望む生活〉と、その分野の支出意欲を明らかにすることだ。今回の分析からは、〈豊かさ〉や〈望む生活〉とお金の使い方の関連を考察する上で、重要な要因がいくつも浮かび上がった。「可処分時間」「バランス」「人のつながり（社会関係資本）」「社交」「持続可能性」「身の丈」「安心と不安」「充実」等々。こうした要因が、具体的な消費分野ごとの支出意欲に、どう関連するのかについて、調べる必要がある。

本研究で示した概念モデルは、暫定的なものである。今後、さらに検討していく必要がある。そして、質問紙調査を行うことで仮説の検証をすることも重要だと考えている。今後の課題としたい。

[謝辞] 本研究はJSPS 科研費15K00732の助成を受けたものである。

本研究においてインタビュー調査にご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。また、本稿査読者の丁寧なコメントにお礼申し上げます。

## 注

- (1) 研究関心に沿って対象者を選ぶ方法を、西條剛は「関心相関的サンプリング」と呼んでいる（西條 2007: 102-103）。西條は、木下康二が提唱する修正版グラウンデッドセオリー・アプローチ（M-GTA と略記）をもとに、「構造構成的質的研究法（SCQRM と略記）」をまとめている。
- (2) 本研究は、跡見学園女子大学の研究倫理審査委員会の審査（受付番号（教）15-001）を経て承認されたものである。
- (3) インタビューの場所は、インタビュアーと対象者以外が立ち入らない、静かな環境の部屋を利用した。
- (4) 上記4つ目のトピックスについては、対象者から十分な内容の語りが得られなかったため、今回の分析に利用できる概念生成はできなかった。消費アスピレーションと他者志向の関連については、今後の課題としたい。
- (5) GTA の中心的な考え方は、grounded-on-data であり、データに基づく根拠のある理論生成の方法を意味する。『社会調査事典』「グラウンデッドセオリー・アプローチ」の項目説明（木下 2014）によると、1960年代にグレイザー（Glaser, B.G.）とストラウス（Strauss, A.L.）によって提唱された質的研究法であり、基本特性として次の点が挙げられている。まず、「データは分析の進展に応じて体系的に収集」され、「データの収集は分析プロセスの全体にわたって続けられる」こと。「分析とは意味の解釈であり継続的比較法」で行うこと。データから説明概念を生成する作業は、初期段階のオープンコーディング（データから概念の可能性が幅広く検討される）に始まる。データを細かく区切る「切片化」という方法でコード化し、ラベルが貼られる。それらを継続的に比較し、相互の関連性を明らかにしつつ統合化を図り、全体の結果をまとめる。データから重要な概念が新たに生成されなくなった段階（これを理論的飽和という）で、分析終了を判断する。GTA は1990年代になって多様化し、日本では木下が修正版GTA（M-GTA）を提案している。
- (6) インタビュー内容を引用する際、発言の文脈を示すために、〔 〕にインタビュアーの問いかけや補足説明を入れた。
- (7) 内閣府が毎年実施する「国民生活に関する世論調査」では、「今後の生活において、物の豊かさか、心の豊かさかに関して、次のような2つの考え方のうち、あなたの考え方に近いのはどちらでしょうか。（ア）物質的にある程度豊かになったので、これからは心の豊かさやゆとりのある生活することに重きをおきたい。（イ）まだまだ物質的な面で生活を豊かにすることに重きをおきたい。」と尋ねている。調査結果の時系列推移を見ると、1975年までは、「物の豊かさ」を求める人の割合が「心の豊かさやゆとり」を求める人の割合を上回っていた。しかし、1976年から1979年までは両者が拮抗、1980年以降は、「心の豊かさやゆとり」を求める人の割合が増加し、「物の豊かさ」を求める人の割合が減少する傾向が続いている。1970年代半ばから、ゆとりを求める気持ちを持つ人が増えていったことがわかる。

## 文献

- 木下康仁, 2007, 『ライブ講義 M-GTA ——実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂。  
 ——, 2014, 「グラウンデッドセオリー・アプローチ」社会調査協会編『社会調査事典』丸善出版: 314-315。  
 松田久一, 2009, 『「嫌消費」世代の研究——経済を揺るがす「欲しがらない」若者たち』東洋経済新報社。  
 西條剛央, 2007, 『ライブ講義・質的研究とは何か——SCQRM ベーシック編』新曜社。  
 ——, 2008, 『ライブ講義・質的研究とは何か——SCQRM アドバンス編』新曜社。  
 佐野美智子, 2004, 『心が消費を変える——消費者心理の変化と消費増減の関係を探る』多賀出版。  
 ——, 2005, 『身の丈消費の団塊ジュニア』『消費&マーケティング』245: 20-27。

〈豊かさ〉と〈望む生活〉

- , 2006, 「家計消費と暮らし向き満足——欲求レベルと社会的比較の影響を考える」『高千穂論叢』41(3): 1-23.
- 佐藤郁哉, 2008, 『質的データ分析法——原理・方法・実践』新曜社.
- 山岡拓, 2009, 『欲しがらない若者たち』日本経済新聞出版社.
- Shor, Juliet B., 2010, *PLENTITUDE: the new economics of true wealth*, The Penguin Press (=2011, 森岡孝二監訳『プレニテュード——新しい〈豊かさ〉の経済学』岩波書店.)